

## 土佐少掾の曲節：その性格についての一試論

横山, 正

<https://doi.org/10.15017/12297>

---

出版情報：語文研究. 16, pp.108-115, 1963-06-30. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 土佐少掾の曲節

———その性格についての試論———

横山正

淨瑠璃段物集は多くの淨瑠璃から、その一部分である道行その他を集めて編纂したものであるため、同じ流派、同じ大夫である限り段物集の本文は勿論、その節附の細部に至るまで、丸本の同じ部分と完全に同一であるべきであり、同版の場合はいうまでもないが、異版であつても、大夫の芸が確立している限り、当然それらは一致すべきものであらう。この丸本と段物集との関係は又、同じ大夫の殆んど同時の段物集相互の間の共通曲目における関係にも、そのままたてはめられる筈である。

江戸の土佐少掾も又、丸本の外に段物集を刊行した大夫であるがその段物集を比較してみる時、右の關係が必ずしも存在していないことに氣附くのである。土佐少掾の段物集に逸題ではあるが「貞享三年五月日大徳三町目うらごこかたや新板」の奥附をもつ段物集がある。これには「土佐掾自筆之しやうさし」云々の識語も見られるがこれが山本土佐掾即ち角大夫の段物集ではなく、土佐少掾のものであることは、その書誌的形式や内容等から明らかである。版元うろ

こかたやは貞享という年代及び住所からみて鱗形屋三左衛門と考えられる。鱗形屋孫兵衛は「以長書賈集覽」も享保以後としているように、貞享頃の鱗形屋は未だ三左衛門の代であつた。右の段物集に年代的に最も近いと思われる段物集に「色竹」がある。これは多くの版を重ねたようであるが、その最初の刊行はかなり早く、元禄六年刊の「なよせ色竹」(京都大学古文字館蔵)の序文中に既に「先書色竹に云々」とこの書に言及していることからみても、元禄六年よりもかなり遡ることが考えられる。そして「色竹」の奥附にみられる版元もまた「大伝馬町三丁目鱗形屋三左衛門」である。これらの時代は未だ初代土佐少掾橘正勝の生前であり、上記の二つの段物集が共に同じ初代土佐少掾の手になるものであることも勿論である。この年代も接近し、版元も同一であり、大夫も同じ貞享三年の土佐少掾逸題段物集と「色竹」とに共通に採用されている段物淨瑠璃について、次に比較考察してみよう。

貞享三年の逸題段物集に収められている段物は、れんしやう高野入・こゑつのだゝかひ四きのだん・前中書王武略之巻(しゅじやうの道行)・二河白道(さくら姫道行)・ゑしんの道行・「名古屋山三

郎」の道行の一部(板心「名古屋」の一丁のみ、前半落丁か)・かつらきつほねおり・浦つくし本ふし・虎御せん待よひのうらみ・世継そが道行」の十段であるが、これらはすべて「色竹」にも収められており、そのうち「二河白道」「ゑしんの道行」の二つは兩段物集共に同一の版本により、完全に一致している。然し残りの八つの段物は何れも版を異にしている。これらの相違は次のようである。

「れんしやう高野入」

貞享三年の逸題段物集所収のものと「色竹」所収のものとが異版であるため、本文の漢字仮・名の使用の相違や仮名遣いの違いのあることはよいとしても、両書間に清濁音の相違があり、節附もかなり著しい違いを示していることは注目しなければならない。清濁音の相違はここでは一応除外して節附中心にみて行くことにする。節附の相違については、ゴマ点の違いが大部分であるため活字では示し難いが、文字譜の部分に例をとれば、

をのへのしもにかねひゞきあらしにまがふ。鈴のこゑ雲井にの  
入色 アクリイロ

はるかうのけふりに至までしんくきもにめいじつ。……………  
ハヤメ …………… (貞享三年逸題段物集)

おのへのしもにかねひゞきあらしにまがふ。鈴のこゑ雲井に。  
ハヤメ …………… (貞享三年逸題段物集)

こうした相違は到る所に見られる。これに、右の引用例中にも見られるような句切り( )やゴマ点の違いまで加えれば、両者の節附の相違は著しいものと言わなければならない。(これらを試みに同じく土佐少掾の段物集「蘭曲文音竹」に比較してみるに「色竹」

とは同版で完全に一致している。大夫・版元の同一の、然も年代も極めて接近しているこれら兩段物集に、これだけの多くの差異を、殊に節附の上に生じていることには十分注目の要がある。

「こゑつた、かひ四きのたん」

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

ハル引 …………… (貞享三年逸題段物集)

「名古屋山三郎の道行」

三十三げんよそにみて。十六丈の御仏を。念比に伏おがみお

とはのみねの。滝津瀬に。心もすめる清水寺。八坂のとうを。

うち過て。きをんのやしろにまふてつ。……………

(貞享三年逸題段物集)

三十三間よそにみて。十六丈の御仏を。ねんころにふしおかみ

おとはのみねの。滝津瀬に心も。すめる清水寺。八さかの塔

を。うち過て。きをんのやしろにまふてつ。……………(色竹)

このように文字譜に著しい相違がある上に、句切りの違いや更に

ゴマ点の多くの違いまで考えれば、両者の著しい節附の相違が明ら

かである。 「色竹」と「闌曲文音竹」とのこの部分は同版である

が、今参考までに丸本「名古屋山三郎」(宝永五年、本)

較してみるに、

三十三間よそに見て。十六丈の御仏を。念比にふしおかみ音

羽の嶺の。滝津瀬に心も。すめる清水寺。八坂の塔を。打すき

て。きおんのやしろにまふてつ。……………

……………(丸本「名古屋山三郎」)

のように貞享三年の逸題段物集とは全く異なり、「色竹」とは、か

なり類似しているが、やはり相違がみられる。宝永の丸本とは年代

がへだたっているとはいうものの、同一太夫の同一曲の節附が三者

三様であることは理合し難いところで、特に右の二つの段物集は、

その年代が接近しているにも拘らず、著しく相違することは注意す

べきである。

「かつらきつほねおり」

これは前掲の「名古屋山三郎」の一部分であるが、ここでも文字譜が著しく違っていることは今まで見て来たものと同様である。ゴマ点の相違も亦多く、句切りの違いもかなり見られる。なお「色竹」と「闌曲文音竹」とに所収のこの段物は同版で一致しているが前掲の木下版の丸本「名古屋山三郎」は右の何れとも版を異にしており、その節附も右のすべてのものと違っている。その上に、貞享三年の逸題段物集とは本文の一部まで異なっているのである。更にさきに挙げた京大本の逸題土佐少掾段物集に所収のものは、丸本をも含めた上掲のすべてのものと節附も用字も異なる。かくて同一太夫の同一曲の節附が版を異にするたびごとに転々と変化し、その拠るべきところを見出しえない状態である。

「浦つくし本ふし」

これも亦、版を異にすることによって、節附の相違が生じてい

る。最も目立つことは、やはり文字譜の相違であり、ゴマ点の違い

も多い。なお「闌曲文音竹」所収のものも、京大本の逸題段物集に

所収のものも共に右の「色竹」と同版で一致している。

「虎御ぜん待よひのうらみ」

ここでも亦、節附の顕著な相違をみる。句切りの相違の外に、多

くの文字譜の違いがみられ、ゴマ点も「見類似のようではあるが、

細部において異なっている。この両者は完全な異版であって、挿入

の和歌の記載形式も異にしている。「闌曲文音竹」所収のものは

「色竹」と同版であるが、京大本の逸題段物集に収載のものは貞享

三年の逸題段物集のものとは節附も用字も相違しており、「色竹」

とは似た節附ではあるが、細部が相違している。

「世継でが道行」

さりとも。恣はくせもの。皆人のまよひのふちや。きのどくの山より。おつるながれの身。うきねのこのへしらべかや引手あまたに。しげゝれと。思ひいだすはかのひとり。かたみの駒。口をとりつまゆへ。しづむ身の行衛。思ひやられて。あわれ也。……(貞享三年逸題段物集)

さりとも。こひはくせもの。みな人のまよひのふちや。きのどくの山より。おつるながれの身うきねの琴の。しらへかや引手あまたにしげゝれど。思ひ出すはかのひとのかたみの駒の口をとりつまゆへ。しづむ身の行衛。おもひやられて。あわれなり。……(色竹「とらせうしやうの道行」)

この二つの段物集の「世継曾我」の道行では本文も異なる部分があるが、殆んど同文の右の部分においてさえも、これだけの文字譜の相違がみられ、ゴマ点にも亦多くの違いを認めるし、句切りの異なっているのも見出される。「鬮曲文音竹」所収のものは右の「色竹」のものと同版であるが、宝永五年の木下版よりも古い版と思われる土佐少掾の丸本「世継曾我」の同じ部分に前記のものを比較すると、貞享三年の逸題段物集とは本文の一部が大きく異なり、「色竹」の本文とはただ一個所、僅かに相違しているだけであるが、節附は前者何れとも、かなり著しい違いを示している。参考に、この丸本から同じ部分を次に挙げておく。

さりとも。こひはくせもの。みな人のまよひのふちや。きのどくの山より。おつるながれの身うきねのこの。しらべ

かや。ひく手あまたにしげゝれと。おもひ出すはかの人の。かたみのこまの口をとりつまゆへ。へしらべかや。おもひやられて。あわれなり。

右のように土佐少掾の「世継曾我」の道行では、各段物集や丸本など版を異にするたびごとに常に節附が著しく相違しており、固定したものを殆んどみることが出来ないことは注目を要する現象である。

以上、土佐少掾の貞享三年刊の逸題段物集を中心にして、これに最も年代の近いと思われる「色竹」を主にし、他の一、二の土佐少掾の段物集や丸本なども併せて、その本文の相違、句切りの差異節附(文字譜・ゴマ点)に関して、煩雑をもちとわず、比較検討して来たのであるが、殊に節附については、同一版本を流用したものでない限り、版を異にするすべての場合において、常に著しい違いのあることが判明した。そして、これらの差異が版を異にする際の不注などから、たまたま生じた偶然的相違というような性質のものでないことは、その数の多いことから、その相違の性質上からも容易に理會できることであり、作曲者の意志によって変更されたものであることは上掲の諸例が明らかに証している。このように土佐少掾という同一太夫のものであるにも拘らず、同版・異版を通じて一貫した不変的固定性が、その節附に見られないことは、土佐少掾の芸風の形成・確立をも疑いたくなるような状態さえ存在しているように思わせるのである。これは土佐少掾にだけみられる現象であらうか。次にこうした点から上方の浄瑠璃の代表として義太夫節

について簡単に眺めてみよう。

## 二

先ず義太夫節の丸本において、同一作品が版を異にしている場合を比較してみよう。便宜上、冒頭部分や道行を比較の対象とする。

「出世景清」の仁兵衛版十行本（奥書形式などからみて初演に近い頃の古版）と遙かに時代の下の文久新版とを比較してみるに、兩者の冒頭部分にはゴマ点に一個所の違いがある以外は、すべての節附が完全に一致している。また道行では、文字譜の「ウ」（仁兵衛版）と「下」（文久版）、「フシ」（仁兵衛版）と「トシ」（文久版）の相違及び仁兵衛版の「ハル」が文久版にない程度の違いが僅かにみられるが、これらは何れも改版の際の不注意による偶然の間違とも考えられるものであり、同様の意味に解される相違はゴマ点にも數個所見出される（なお句切りの違いは冒頭・道行共に散見される）。然しこれほど年代の離れた異版であるにも拘らず、右の程度の偶発的相違にとどまっていることは、土佐少掾の場合の多くの相違とは全く比較にならない程度である。

「せみ丸」の山本版七行本と谷村版十行本とのそれぞれ冒頭部分を比較するに、節附では七行本の書出しが「地中」とあるのに対し、十行本では「地下」とあり、また七行本にはある「ウ」の文字譜が二個所だけ十行本に無いところがある。然し後者は十行本が稽古用よりも読物用としての需要に応えたものであるため、節附を簡略にすることはしばしば見られることで、これもその例に過ぎない

と考える。その他はゴマ点に至るまで完全に兩者一致し、句切りの相違も見られない。また道行においては、本文に「旅人も」（山本版）、「旅人の」（谷村版）の違いが一個所あり、句切りの違いが四個所ほどある。節附では、「中ノル」（山本版）「中ハル」（谷村版）、「小ラクリ」（山本版）「ヨクリ」（谷村版）、「中」（山本版）「ハツミ」（谷村版）、「フシ」（山本版）「フシ中」（谷村版）の相違及び山本版にある「フシ」が谷村版に欠けているのが一例見られる。然しこれらのうち「中」と「ハツミ」との相違以外は、殆んど不注意から一方が落したもので、或は十行本の省略と見られるものばかりである。然も道行全体での、これだけの数は極めて僅かということができ、土佐少掾の場合とは格段の相違である。

同様に「用明天王職人鑑」の八行本と十二行本、「羈山姥」の七行本と十行本、「国性爺合戦」の七行本と十行本、「国性爺後日合戦」の七行本と十一行本などをそれぞれ比較してみても、大体右に挙げた二作品の場合と同じ結果を得ることができる。更に時代が下つてからのもの、例えば「愛護稚名歌勝闘」（宝曆三年）、「近江源氏先陣館」（明和六年）の各七行本・十行本の比較においても亦同様である。

即ち義太夫節の丸本における版を異にする場合の節附の相違の傾向は、その總数が土佐少掾の場合に比して著しく少なく、然もそれらの差異は不注意による脱落・誤記と見られるものが多くて、意識的に行なわれたと思われるものが少なく、十行・十二行などの中字本のため故意に省略されたものも相当数あり、然も、これらの傾向は年代の新旧に殆んど關係がないことが窺われる。義太夫節は年代

が下るに従つて、その語り口が次第に技巧本位に細かくなつて行つたことは周知のところであるが、丸本に公開される程度の簡単な最も基礎的な義太夫節の本質は既に早く確立、固定されておゝり、変更訂正の必要を生じなかつたりしいことが以上の事実から考えられる。これが古曲を後の時代に再刊する場合も、殆んど同様の節附で素人稽古の基礎的テキストにはなりえた理由でもあつたのである。

### 三

次に義太夫節の丸本と段物集、或は段物集相互の間に共通する淨瑠璃について、その節附の相違の有無などを瞥見してみよう。

先ず明らかに異版である十行丸本「出世景清」(仁兵衛版)と義太夫段物集「千尋集」に収められている「出世かけ清」とから、その小野姫道行の初めの部分を比較してみるに、本文中の句切りの相違が二、三個所と文字譜の違いが三個所程度あるに過ぎない。ただしゴマ点の相違はかなり見られる。土佐少掾の場合、同じ程度の長さの引用例中、文字譜だけでも二十個所ほども違つてゐるのに比較すれば、この義太夫節では格段に少ないと言わなければならない。なお、山木版の義太夫段物集(義太夫・近松連署形式の奥附をもつもの)に収められてゐる「出世景清」の同じ道行の部分を見るに、漢字・仮名の用字の違い以外には句切り・ゴマ点・文字譜などのすべてにわたり、「千尋集」と殆んど完全に一致してゐる。このことは義太夫節では版を異にする段物集相互の間においても殆んど何らの変化も生じてゐないことを示しており、殊に問題の多い山木版にお

いても、こうした事実の存在することは注目の要があらう。

次に十行丸本「天智天皇」(山本版)と義太夫段物集「日待調宝記」(元禄初年刊、西沢屋九郎版)所収の「天智天皇」とから四段目冒頭と道行全体とを比較するに、本文の一、二の字句の相違が散見され、段物集には句切りやゴマ点の省略がかなり見られるが、文字譜では、これだけの長文中に僅か六個所程度の違いを見出すだけであり、然も、その大半は段物集が十二行であるために十行本よりも一層句切りやゴマ点と共に文字譜をも省略したため、或は偶然の間違(フシノルとフシハルの如き)ともみられるもので、意識的と思われるものは二例ほどに過ぎない。この同じ部分(ただし道行だけで、それ以前の部分は無い)が前記の山木版の義太夫段物集に収められているので右の十行丸本に比較するに、「日待調宝記」よりも一層丸本に近く句切り・ゴマ点・文字譜など殆んどすべて一致しており、ただ僅かに句切り一、二個所、ゴマ点三、四個所、文字譜三個所が相違してゐるだけである。然も、これらの多くは偶然の脱落とも考えられる性質のものである(ハルフシがハルとなり、ウが脱落してゐる如き)。当時、山本から機会あるごとに偽版として非難された山木刊行にかかる段物集にして、なおこれだけの山本版丸本との一致をみることは、さきの「出世景清」の場合と併せ考へる時、義太夫節においては版の異なることによつて、その節章等に変化を生じないことが原則であつたことを示しており、土佐少掾の場合とは著しい根本的あり方の相違を見出すことが出来る。

こうした傾向は「系がらの平太」その他の丸本と段物集所収のものとを比較しても大体同様に見られるのであるが、余りに煩雑にな

るため省略することにし、最後に丸本と年代の遙かに下る段物集とを比較してみよう。

「用明天王職人鑑」の「かね入の段」を八行丸本（山本版）と六行段物集「音曲琴大全」（全篇が年譜）とについてみるに、「かね入の段」全体で句切りの違いが三個所ほどある外、ゴマ点では、かなり差異が認められる。然し文字譜では大きく年代が離れているにも拘らず、僅かに四個所、即ち丸本の方に「中」のないもの、丸本の「下」が段物集にないもの、丸本の「中」が段物集では「フシ」になっているもの、丸本の「上地ハル」が段物集で「上地」とあるもの、の四つの相違が見出されるだけであり、この中には、不注意による脱落のものも多少含まれているかと思われる。（なお、本文には一個所「……けり」と「……ける」の相違点がある。）

次に更に一例「丹波与作待夜のこむろぶし」の「道中双六」の部分を、山本版八、九行本と「音曲琴大全」所収のものとのよつて比較してみよう。これは一方は偽版といわれるものであり、他方は大きく年代の下る段物集で、この両者の間の節附には最も混乱が予想されるのであるが、調査の結果は全くこれと反対である。即ち「道中双六」全体で句切りの相違が二、三個所あり、ゴマ点の違いも散見されるが、文字譜は唯一個所「ウ」の位置が両者において少し異なっているものがあるだけで、完全に一致している。偽版といわれる山本版においても、初演から多くの年月を経た後に行数も六行に改められて刊行された段物集においても、これだけの節附の一致をみることは、義太夫節の基本的なものが早くより完全に確立していたことを明瞭に語っているものと考えてよいであろう。

## 四

土佐少掾の段物集相互間、或は段物集と丸本との関係において、版を異にすることに依つて節附に著しい差異を生じている現象が、他の浄瑠璃においても存在するものであるか否かを、義太夫節を例にとつ眺めて来たのであるが、その結果は、義太夫節丸本の相互間においても、丸本と段物集、或は段物集相互の間でも、殊に偽版といわれた山本版または遙か後の段物集との比較においても、その節附、特に文字譜の相違は土佐少掾の場合とは比較にならぬほどの少数であった。然も、その中には版を異にすることによつて不注意などから生ずる無意識的脱落や錯誤とみられるものも含まれ、義太夫節においては異版や年代の相違などに依つては差異を生じないの原則としていることが窺われて、音曲としての基本的曲風は早くより確立していたことが判明したのである。

これに対して土佐少掾の場合は、同じ版木の流用でない限り、版を異にすることに、その節附（ゴマ点・文字譜とも）に著しい相違を生じているのであり、殊に同一太夫により、同一版元から、年代も接近して刊行された段物集相互の間においてさえ、この現象が濃く存在し、然もそれが明らかに意識的に変えられたもので、偶然に生じた差異でないことすら窺われたのである。義太夫節の、あらゆる場合に一定不変を原則とする基本形式を示していることは完全に對蹠的であつて、土佐少掾の浄瑠璃における、こうした事實は、土佐少掾自身の芸風の基礎的確立・完成が未だ実現されていなかった



ことを語るものと考えないわけにはいかない。或は又、彼の芸風の特徴が極めて流動性に富み、常に変化を求めて推移して行く性格のものであったとも言えるかも知れない。然も、この現象は貞享から元禄へかけて彼の晩年近くになつても見られる。これが彼の曲風の絶えざる進歩であり、複雑化であつたと言えるとしても、そして、それが義太夫節の影響などに依つて助長されたものであつたとしても、流祖としての初代土佐少掾の独自の曲風の自信と安定性を欠いたことは争われず、浄瑠璃節という芸の一つの流派としての確立程度の弱さを否定することは出来ない。「浄留利古今の序」に「あづまなまりは土佐ノ掾」として土佐少掾の土佐節を評してあり。御前づとめの小姓衆が。げんぶくいごは色なくて兄分したふ姿あり。

と言っているのも、元服により若衆としての色氣を失つた男の自己の美に対する自信のなさに、土佐節の自信のない不安定さをも譬えたものとは解釈できないであろうか。この一つの流派としての芸の独自性の定型の確立度が弱かつたことは、初代土佐少掾橋正勝が芸界を去ると、忽ちに同流は衰微に傾いて、その衰退を挽回するために多く刊行されたとみられる宝永五年の木下版の土佐節正本（黒木勘藏氏著「浄瑠璃史」、近世文芸」第五号所載の鳥居文字氏「土佐少掾について」等参照）の節附が貞享三年の逸題段物集や「色竹」のものとも更に異なつてることによつても窺うことが出来るであろう。即ち固定した定型をもつという点において極めて弱かつた初代の曲節が、その後継者によつて整理されて再び初代生前の節附と相違して来たのは当然であつた。

江戸の土佐節衰滅の理由としては、従来、その曲節や作品が上品ではあつたが、変化や刺戟に乏しく平板であつたことが挙げられているが、初代以来の、これまでみて来たような不安定性から脱けきれなかつた土佐節が、確固たる芸風をもつた義太夫節をはじめ、他流の浄瑠璃節に影響され、圧迫されて、遂に宝暦にもなれば乞食の業にまでなつたと言われるほどに圧倒されてしまふ運命を辿つたことは当然とも考えられ、この原因は初代土佐少掾における曲節の不安定性にも既に十分あつたものと見ることができると考へる。

△附記√紙数の関係で、引用すべき実例の多くを省略し、それを掲げた場合も極く小部分にとどめたため、実証性に欠ける点をも生じたことを許されたい。